



新十津川望郷会

会

報

第9号



新十津川望郷会長
山本 敬一郎

第九号の発行にあたって

さわやかな初夏を迎え、会員の皆様には益々お元気でお過ごしのことと存ります。

「望郷会報」も皆様のあたたかいご支援とご協力により第九号を発行することができました。

国家財政引き締めの影響を受け、地方自治体も厳しい行政運営に取り組んで居られます。私たちもそのご努力に対し、心から声援を送りたいと思います。

ピンネシリの山なみも次第に緑が濃くなつてきました。

今年も、豊かな作況に恵まれますよう心からお祈りしたいと思います。

新十津川望郷会は、新十津川を古里とし、現在は他の市町村で活躍している人たちによつて昭和五

十年に創立されたのであります。が、平成十二年に開町百十年記念事業に協賛して町役場前の国道沿いに「望郷の碑」を建立しました。

それから早くも六年の歳月が流れ去りましたが、「誇り高き郷土新十津川との縁を心とし、「郷土との親交並びに会員相互の親睦及び共励」に向かつて、今年も力をあわせて進んでいきたいと思いますのでよろしくお願ひします。



新十津川町長
小畠 荘一

望郷会報9号の
発刊にあたり

の受け皿となる地方自治体に対しては、行財政基盤の強化や新たな市町村合併の取り組みの推進などを進めようとしています。

自主自立を宣言している本町は、今後の将来を見据えた中で、行政財政改革を進め、刻々と変化する情勢を的確に分析し、町民の皆様と協議を図りながら執り進めて参りたいと考えております。また、

行政事務の効率化を図るために雨竜町との新たな事務共同化を進め、今年四月に共同事務の運営協議会が発足しました。十八年度は「地域包括支援センター」の設置と共同運営や一部事務事業の共同実施に取り組みます。

地域においては、社会情勢の変化から昨年、行政区画再編成審議会を設立し、これから地域のありべき姿を検討、協議し、平成八年一月一日より行政区画を二十二行政区から十一行政区へ再編成し自治活動をスタートいたしました。今後は、地域と行政の役割を明確にし、「地域でできることは地域で」を基本にまちづくりを執り進めて参ります。また、地域住民が主体となつて地域づくりが進

なり、農業者にとつて大きな喜びではありました。市場価格の低下など生産者を取り巻く環境は非常に厳しい状況にあります。しかし生産者、関係団体の不斷の努力により空知管内では、高品質米の出荷率は最上に位置しております。

国の方針である「三位一体改革」による地方交付税の削減、国庫補助負担金の削減など行財政は非常に厳しい状況にあります。また、北海道も道州制の実現に向け、そ

の受ける方となる地方自治体に対し

められるように、町職員が各行政区へ出向き行政が持つて情報の提供や助言を行い、個性豊かな活力のある地域づくりを支援する「地域サポート制度」を導入いたしました。

ここで、明るい話題として、昨年八月に三重県で開催された中体連全国大会で、新十津川中学校剣道部が、みごと男子団体で北海道勢初の準優勝を飾ったことは、まさに快挙であります。「剣道のまち新十津川」を全国的に知らしめ、少年剣士たちの栄誉を称え町長賞を贈ったところであります。また、

少年剣士たちの栄誉を称え町長賞を贈ったところであります。また、昨年秋には本町の女性コーラース団体「アザレア」も長崎県で行われた全国大会に出場し、消防団では、消防操法訓練大会で全道優勝するなど町民の活躍が見られ、全国へと本町の名を広めました。

さて、今年度より本町では、新十津川町の豊かな自然環境や温かい人のつながりを次世代に引き継ぐため、「ふるさと応援基金」を創設いたしました。興味や感心の

ある会員の皆様方の温かいご支援をいただければ幸いと存じます。最後になりますが、望郷会員皆様のご健康と新十津川望郷会のご発展を心からご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

新十津川を訪れた

司馬遼太郎(2)



新十津川望郷会会长
山本 敬一郎

はじめに

司馬遼太郎は、著名な作家で平成八年に他界されたが、現在も遺作NHKの大河ドラマ「功名が辻」が放映されている。

昭和五十四年頃「街道をゆく」北海道の諸道」取材のため新十津川を訪れている。

前回(第8号)では、月形を出版した筆者が、国道沿いの農村を車窓から見ながら多くの困難に耐えて来た新十津川の人達の経験した歴史を回想する。

今回は、町役場で出迎えてくれた五人の故老の回顧談を中心に話が進められてゆく。

「町のなかの、たとえば気楽なラーメン屋とか、コーヒーショップのようなところで落ち合いたいのですが」

と、あらかじめ新十津川町の町

役場に連絡してみた。

明治二十二年、大和の十津川村からここに入植して原野に最初の斧を入れた世代の人々は、今はいない。その次の世代の人々がいる。その人々の一人か二人に町のなかでお会いできればと思つたのである。

ところが、新十津川町にはそういう稼業の店は一軒もないという。

そのことは、村をつらぬく国道275号でこの町に入つてみて、よくわかった。北海道でもつとも富裕な農村といわれるだけに、営農家たちの居住も余裕がありそだしが、

公設の集会所もそろつていて、飲食店のような営業用の溜まり場の必要はなさそうに思われた。

結局、町役場へゆくと、すでに故老たちが待つていてくださった。青木金吾氏(明治二十三年うまれ)今中茂晃氏(明治二十八年うまれ)泉谷省吾氏(明治三十二年うまれ)丸谷竜郎氏(明治三十六年うまれ)藤崎信一氏(明治四十年うまれ)

金吾、省吾という威張った命名法は、幕末の大和・十津川郷の通称に多かつたようで、名刺をもらつ



てひどくなつかしいような気もした。

「私は、最初の集団入植組じやないんです。明治三十五年に単独で入植しました」と、青木さんはいわれる。人々にとつては、大和・十津川は父祖の地だが、氏にとつては直接の故郷になる。この人は明治二十三年十津川の上野地うえのじのちかくの谷瀬たにせにうまれた。

谷瀬については、私も記憶がある。上野地の道路上からながめると、十津川渓谷をへだてて西方にある急斜面がそだつたのではなか。壁をたてたような斜面に杉の梢がかさなり、ただ一面に杉だけたようにおぼえている。

「水陸位みね易かへ」

大水害で陸地が湖水になつてしまつた、という意味のことを、明治二十二年十月、奈良県知事税所さいしょ篤あつしが北海道へゆく十津川郷民に対する告諭文のなかで書いているが、谷瀬の被害もはなはだしかつたであろう。

「奮然、此瘦土せき（註・十津川郷のこと）ヲ辞シテ彼ノ沃野（註・北海道のこと）ヲ耕スハ洵に善後ノ良策ニシテ」というが、青木氏

の父君は水害後十数年「瘦土」の故郷の復旧につとめられたらしい。

やがて満十二歳の青木氏をつれて、すでに郷民が入植しているこの地に来られた。そのときでもなお、このあたりの景観は、まったくの原生林で、切り拓いたところも、直径一メートルもある大きな切株がごろごろしていました。

木を切つて切株をおこして捨てるか焼くという作業は、言語に絶するような苦労であつたらしい。「入植といつても、木を切つて焼くことが先決なんです。みな太いから大変で、焼いたあとに菜種をまきました」

と、かわつてまだ若い（明治四十一年うまれ）藤崎さんがいう。この人だけが、父上が新潟県出身で骨組みががつちりしている。

「ああ、菜種でしたか」
青木さんが、ひきとつて言つた。

「私の記憶では、木を焼いてまたのが小豆でした。地力がまだまだみずみずしかつたものですから、六俵もとれました。いまなら、せいぜい二俵とういうところでしょう」

当初は、水田はわずかしか開か

れていなかつた。

最初に入植した人の子である泉谷さんがその母上からきいておら

れる話では、早々のころは米は一年に二斗程度しか取れなかつたといふ。

「私の高等小学校二年のころですが、親にいわれて餅をついた。暗がりの二時に起きて搗くのですが、夕方までやつても四臼つくのがやつ

とでした。モチゴメにトウキビなどを入れるために粘りが出ず、なかなか餅になつてくれないです」

「大和の十津川の暮しも、貧乏の骨頂でしたよ」

十二歳まで十津川にいた青木さん

がいつた
「平素は水ばかりの麦がゆです。米を食べるには盆と正月だけでした」

つづけて、
「そういう暮しでしたが、十津川の者はみな文字がありましたな」

（朝日新聞社編「街道をゆく15海道の諸道」より）

新十津川町に住んで居られず、白糖郡白糠町とあり、白糠町名譽町民とある。

濃い眉、白い口ひげが顔の気品をたすけている。ずっとしりとした声は、意味のたしかな言葉しか吐き出さない。名刺を見ると、いまは

ある青木さんは、今年八十九歳になる。

髪をとどめていない円頂の下に濃い眉、白い口ひげが顔の気品をたすけている。ずっとしりとした声は、意味のたしかな言葉しか吐き出さない。名刺を見ると、いまは新十津川町に住んで居られず、白糖郡白糠町とあり、白糠町名譽町民とある。

（朝日新聞社編「街道をゆく15海道の諸道」より）

新十津川町に住んで居られず、白糖郡白糠町とあり、白糠町名譽町民とある。

（朝日新聞社編「街道をゆく15海道の諸道」より）

新十津川町に住んで居られず、白糖郡白糠町とあり、白糠町名譽町民とある。

青年団活動の想い出



札幌市

(新十津川望郷会副会長)
高 棒政義

いまでは、「青年団」の言葉は死後になつてゐるのではと思われるが、戦前・戦中は人々の生活の中にがつちり組み込まれ、なくてはならない言葉であり組織であった。

町史をみても、国策として青年

団活動の育成に力を入れていたことが分かる。当時子どもであつた私にとっては、本当のねらいは別として、楽しかったことのみが残つてゐる。

運動会、演芸会、盆踊りなどで、その時期になるとワクワクしてその日のくるのを待つていたことを覚えてゐる。

（運動会）

昭和十年前後は、小学校の運動会に組み込んで実施していたようだつたが、その後、青年団単独の運動会が実施された。種目も距離走、重量挙げ、幅とび、高とびな

ど青年団独特的の種目があつて樂しみのひとつであつた。競技の判定がよくもめてなかなか決定ができないのも特色的ひとつかも。

各地域での競技が終了すると、中央の河川敷にあつたグランドで全村の競技大会が開催されていた。

時が過ぎ、戦後間もなく故郷に就職したことから、戦後の青年団に加入し運動会に選手として参加させてもらつた。

時が過ぎ、戦後間もなく故郷に就職したことから、戦後の青年団に加入し運動会に選手として参加させてもらつた。

時が過ぎ、戦後間もなく故郷に就職したことから、戦後の青年団に加入し運動会に選手として参加させてもらつた。

大望の夢が実現



札幌市新十津川望郷会理事

和 平 康信

桜の季節が北上し間もなく北の大地にも訪れる頃の平成十三年四月二四日に長年の念願であつた熟年修学旅行が実現した。

私達の子供の頃。(少年時代は)大東亜戦争の真っ只中でありました。そして終戦となり又戦後の混乱期で修学旅行は出来なかつた。

新十津川国民学校、現在の新十津川小学校の卒業生の私たち同期生の長年の夢でありました。

当時は混乱期で、又農作物は不作で食べる物、着る物が不足し、又遊び道具もない恵まれない時代

み笠をかぶつて鈴や造花をつけた派手な格好をして踊つたものでした。しかも国道の真中で輪をつくつた。自動車など当時はまず通らなかつた。露天も出ていたようだつた。レコードでなく、すべて肉声の歌でおどりをリードしたものだつた。

これまでにも同期会を二年又は三年に一度新十津川町や滝川市には札幌市などで開いてきたが、その度に「修学旅行の思い出がなく寂しい」の声が上つたため又、皆の強い願いが実行となつた。今思えば半世紀が過ぎた、五十五年の月日で皆高齢者である。既に亡くなられた人は少なく、又、体調が思わしくなく参加出来ない人も多くいます。

大望の夢であつた熟年修学旅行は二三名で皆さんと共に喜び合ひ良い思い出を残し何よりの幸せ。

私達七名が幹事となり企画をしたが、中々大変です。浜多輝男氏、玉堀光夫氏、今村保氏、山道清一氏、藤井八重さん、水戸貞子さんの協力により全員が楽しく良い思い出深い熟年修学旅行が実現した。

旅行会社は中央バスグループ(株)シイービーツアーズにお願いし大型観光バスを三日間貸切り又三名が同乗する。出発は新十津川町役場前集合し、役場より飲物の差し

（演武場は、青年団活動の拠点にと行政で各区に建設したもの）

（盆踊りは、青年団活動の拠点にと行政で各区に建設したもの）

（盆踊りは今でも各地で開催されているが、当時の青年の踊り子は、女物の着物を着てたすきかけ、編

み笠をかぶつて鈴や造花をつけた派手な格好をして踊つたものでした。しかも国道の真中で輪をつくつた。自動車など当時はまず通らなかつた。露天も出ていたようだつた。レコードでなく、すべて肉声の歌でおどりをリードしたものだつた。

これまでにも同期会を二年又は三年に一度新十津川町や滝川市には札幌市などで開いてきたが、その度に「修学旅行の思い出がなく寂しい」の声が上つたため又、皆の強い願いが実行となつた。今思えば半世紀が過ぎた、五十五年の月日で皆高齢者である。既に亡くなられた人は少なく、又、体調が思わしくなく参加出来ない人も多くいます。

大望の夢であつた熟年修学旅行は二三名で皆さんと共に喜び合ひ良い思い出を残し何よりの幸せ。

私達七名が幹事となり企画をしたが、中々大変です。浜多輝男氏、玉堀光夫氏、今村保氏、山道清一氏、藤井八重さん、水戸貞子さんの協力により全員が楽しく良い思い出深い熟年修学旅行が実現した。

旅行会社は中央バスグループ(株)シイービーツアーズにお願いし大型観光バスを三日間貸切り又三名が同乗する。出発は新十津川町役場前集合し、役場より飲物の差し



入れを受ける。三日間の酒、ビール、その他飲物をバスに積み込み、苦小牧港よりシルバーフェリーで八戸港→十和田湖→古牧温泉宴会付です。出発より酒飲放題でした。フェリーはまったく揺れる事はなく静で船酔もなく全員で酒盛となり飲み食べるほどに話は、弾み心は青春旅の思い出話に花を咲かせた。全日程を通じて天候に恵まれ本道より少し早めの花見も堪能でき、十和田湖、古牧温泉をめぐる旅は大成功でした。

「夕づつを見て」（佐藤春夫）
清く かがやかに たかく
ただひとり

なんじ 星のごとく（金星）。
に刺激をうけて「新波止場の想い
出」を書きます。

幼少の頃、菊水町のグランドで、石狩川を遡上する丸木舟の珍しさ、時には、帆かけ舟の格好のよさに見とれた想い出がある。蝦夷開拓の初期には、道路なし、鉄道なしで人の往来、物資の輸送に困難を極めた。石狩川の水運は重要な役割を果たしていた。

かつて、アイヌの記述で砂沢某の話、「旭川から日高間のコタンの往来が、いつも簡単に・・・」と知つて、その健脚に驚いたが、新十津川町史で後木喜三郎談・入植時、六百余の人、六千個を超える荷物の運搬に苦労したこと。水運の利用、囚人の協力等、苦勞の様子を感じた。又、弥生



安田 麻夫
登別市(新十津川望郷会副会長)

ふるさと 心の原風景(四)

川の河口に波止場があり、その菊水町寄りに、官給品を一時保管する倉庫があつた。と、私が生活した新波止場は、徳富川の河口、橋本町(五区)の南端、滝川駅の裏にある所がありました。

昭和二年。大正から昭和になり、第一次世界大戦の好景気も影の時代。世界的大不況下、日本も濱口首相の暗殺、経済・金融の混迷。

加えて凶作が続き、世情騒然、ラジル移民の話も出はじめた。この年の九月に、我が家にも大騒動が起きた。父、三十三歳で急死するという大ハプニング。

大正の好景気に菊水町(六区)に開店。亞麻会社の操業が軌道にのり、日進の砂金採り、特殊農作物が高値をよび、商舗を拡げ繁昌するかに見えたが倒産、負債整理、一家離散と云う浮き目にあう。

私は、祖父嘉太郎の妹「松」の婿仁蔵じいさんと同居、新波止場の家で養つてもらうことになった。豊かで華やかな商店の跡取りが、

いうものは全く無い。豊から貧へ、奈落の底に落ち、子供故に、精神的ショックに身も心も凍りついてしまったよう。

船頭さんは降つても晴れても、判を押したように、朝、夜があけたら川に行き、客が来ても来なくて、夜、暗くないと帰つてこない。啞ではないが話をしない。正直、律義・仕事一筋。天職として働き続ける人。

時代は日々、進化して便利になり、反面、収入が伴わず、矛盾の中で取り残されていく。

物・金・人にかかわらない。無

の世界に生きること、色即是空。唯一恵まれたこと、社会と没交渉、船頭さんは終日、舟の上、石狩川は太古の昔から大量の水を流している。大自然の恩恵の中で、人物・金に煩わされずアイヌの暮らしそのまま。縄文の昔に戻つたよう、単純・清楚・静寂・融和の自然環境。これが何よりの「お宝」でした。

人間放れした清らかな聖域で一年を過ごした私の波止場は生涯忘れられない想い出がある。その最たる者は仁蔵じいさんの後ろ姿の

教育であつた。自慢の凍り橋作りもその一つ、寒風の中、唯黙々と雪を運び柳を切つて束にして敷きつめ雪を積んで踏みかためる。昭和二年の暮、防寒具長靴など手に入らない時代・“冷たい”“寒い”と一言も言わず、唯黙々と動き続け、寒中に石狩川の流れの上に氷の橋ができるまで、設計図は頭の中に在り、天候に左右されず、仕事の手順でコントロールして、まさに偉大な教育者、人間教師であつた。悔しい哉、三年後、私が見た船頭さんの姿は手拭いを口に咬えた水練の名手、仁蔵じいさんの凍りついた屍が家の前に運ばれてきた。殉職。氷が流れて、危険と断つたが急用頼むと懇願されて舟を出し氷塊に棹をはじかれ川に転落。十日後に発見された。些かの報酬もなし。無欲の人ふさわしい遭遇だつた。

新入生として、新十津川校に通学する。かすりの着物に、ぞうりを持って、貧相な姿だが心は晴れて、六年生二人・恒おじと友人の有馬のたっちゃんに連れられて恐

「文武の誉 十津川の 教えの
庭に 萌え出でて」の校歌の示すごとく。正に、大正ロマンの開

社会に元気一杯に、飛び込んだ。
元気すぎて失敗、学習ルールを

知らないから中々なじめない。ベ

ランの女の先生に散々、迷惑をかけた。すぐ上の姉は、毎日廊下の窓から教室の中を見、立たされている弟を見て「今日も」と毎日のこと、野人から立ち直るのに二年歳月がかかつた。波止場の縄文人がシステム化された近代社会人になるまでの反動は「操業乙」。これも人生史の勲章の一つであろう。

佐藤春夫の詩は私に対する励ましの詞としてありがたく頂きます。三年生の担任が「大学は出たけれど」の時代の学士先生。僅か一年足らずで炭鉱会社の労務部長に抜擢された逸材。この先生に人間として認められ、可愛がられて、春の詩「夕づつ」への道を蘇り立ち直る。卒業式には学年の総代となり壇上で校長先生から「お前が安田か」と慈愛溢れる眼差しで“あの有名な野人の急変を喜ばれた”と感動一沢の想い出。

早いもので、母が昭和二十二年十月二十八日に四十七才の若い年令で他界され、一年余りが過ぎた頃、お世話して下さる方がいて姉冬香、次女世津、妹の三女津代、四女亜希、五女祥子と、六人そんな状況で縁があつて、結婚でもする時は父親吉次も一人では苦労多かるうと、後添（後妻）でもと近くに住む稻葉ハツをとの話が父と仲介人との間で秘かに進められた様で、ハツには五才になる男の子が居ました。勿論私共姉妹達は親戚も後添いを入れる事は大反対でした。成さぬ仲と申しますが、姉妹達は思春期の年頃、私は女姉妹の仲で育つた血の氣の多い多感期抵抗心は大変で、当時の社会情勢特に戦後日の浅い昭和二十三年頃です。後添を入れて親子仲違い義理の子達共うまくゆかず家庭崩壊、それ等を耳に眼で見乍ら、姉妹仲良くすれば例え貧しくも幸い

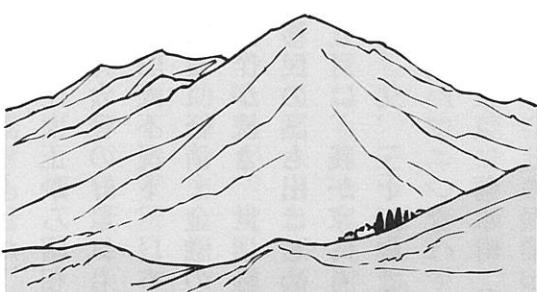
花期か、同級生四人（伊藤・佐藤・上杉・安田）も叙勲の栄誉に輝いた。町民の生活を守る為、巨大な石狩川堤防が完成。同時に、新十津川渡船場も姿を消した。



札幌市（元・さっぽろ大和会々長）

石 本 料 詰

自叙伝（2）



な家庭があると……そうこう二ヶ月位が経つてハツは男の子を連れて入つて来ました次第で、それからと云うものは言葉で又、文章で現わす事は出来ません。生き地極でした。姉妹そして私も煮湯を呑まされるとはこの事かと、三度の食事も父とハツとテーブルを囲んでの事はほとんどありません。ハツが来て数ヶ月が過ぎた頃、姉二家と炭鉱に嫁ぎ悠々自適の生活に入りましたが、私共三人には何の変哲もなく陰惨な日々が続き、相變らず馬小屋や納屋で寝た事も度々です。父達二人が寝静まつて家に入り食事を済ませ床に付いた事も、その頃、私がハツに息を止める様にして、お母さんと呼べる事が出来たのを憶えています。断腸の想いでした。ハツは私に母と呼ばれた事がどんなに嬉しかったのか涙を流していたのを今でも、そして生涯忘れる事はないです。姉、妹達はハツには一度も母さんと呼び掛けた事は有りませんでした。今わかりますが、母ハツが体調がす

ぐれぬので利治の一年生の入学式は私が連れて行きました。ハツは大変にその事が嬉しかった様でした。順風満帆の外面ですが、実は内面では同じ年令の末っ子の妹祥子とハツが連れて来た義弟利治との仲がうまく行かず、二人に何度も悟す様に云い聞かせても、次の日は仲違い、それも頭痛のタネでした。父吉次はそれ等の二人の仲もあつて利治につらく当り、家庭内の不仲でも私達に当り、もともと父の酒乱の性癖も（アルコール依存症）が重なつて毎日が暗いトンネルの道程でした。父は酒に酔つて激情するとデバ包丁を砥いで私達一同も刺殺して己も死んで一家破壊消滅してしまうと、そんな家庭不和の狭間の屋根の下で十余年も続き、肉体的にも精神的にも疲れ果てた夜、妹津代が父を殺して私達も死のうと、父が酔つて帰り大好きな鼾を大きく鳴らし熟睡する時、二人で父を刺して殺して始末しようと思つた事、何度か：その後の私は精神的肉体的にもかなり疲れていて思春期青春期を痛めつけられていた事が自殺も家出も考えた事、幾度あつたか、その頃、

私の心に秘めてた女子がいましたが、それすらも崩壊寸前の家庭情景を見てそんな恋心に秘めて（片想いで良い）ままの毎日でした。冷静になつて考へる時、姉妹見捨て自殺をしたり家出を決行する事はやはり思い立つものでした。それが長男そして位牌もちの宿命と想い、幼い時より母より躰けられが長男として位牌もちの宿命と五体に染み付いていたのか、そのさ中、恋愛交際中だった妹津代も年頃縁談が持ち上り本人も大変悩んだ事でしょう。妹には後添の生活でも一番苦労させたから幸せになつて欲しいです。苦しい生活の中でも月日の経つのは早いものでハツが石本の家庭に入つて一年余りが過ぎた頃、持病の肝臓が再発通院して居たが、昭和二十四年の秋に幸せ少ない人生を四十八才で連れ子利治を遺して他界されました。終生間際に私の手を握り利治を頼むと眼で云つて居たのを今想えば素直に受取れるのです。ハツの通夜そして告別式繰上げ法要をと終えて義弟の利治がハツ他界後、議でしたが、故ハツ方（稻葉家）は逃げる様に帰り私達石本家で丈での家族会議になり、私の姉妹義

兄そして大本家の国雄さんとの相談になり殆どが利治を家で引き取る事に大反対でした。それにはここには話す事の出来ぬ事情があつた訳で（別稿で）した。結論が見えぬまま数時間、夜中すぎ本家の國雄さんの一言：「私に男兄弟もない事だし苦労して育てたら必ずお前の相談相手になる、手足になつてくれる、面白い育てて見て駄目なら己が引取つて一人前にする」。とその一言で私の弟として面白見る事に決着。その頃義弟利治は一人で何処へ授けられるか不安にかられ押入の中で小学二年の幼な心を悔いていた事かと。（中学生頃聞かされた）今想えば義兄に繋る一念しか本人は無いはず。それを鬼心で切り捨てる事は當時の私はまだ二〇才そこそこで世の儂さをしみじみと見せ付けられ押し付けられた宿命と心に刻んで生きています。その後、生活のカラーも特に変る事なく父は余り家も返り見ず相變らずの酒依存の頃の私は精神的肉体的にもかなり疲れています。その後、生活の毎日で義弟の利治がハツ他界後、又、私達にすまぬとの想いからか、辛く当る様でした。それは己自身の身から出た錯で罪のない利治に

厳しくは人間失格ではないかと。その頃、四女の亜希も近くの農家に嫁ぎ平穏な日々が続き台風一過の和やかな団欒一家でした。好事魔多しの如く末っ子の妹、祥子が中二の春におたふく風邪で通学のそばの診療所に行つてはいたが、滝川の市立病院で急性腎臓と診断され至急翌日入院で帰宅、そして夕方六時頃、急変して亡くなりました。それが幸か不幸かその日の朝初産でメス牛が生まれて姉妹義兄集つて祝盃をやろうと自宅に来て居たので祥子は皆んなに、死水を取つてもらいました。人生つてこんな宿命もあるのだと嬉んだり悲しありだと：

昭和二十五年秋、私には忘れる事の出来ない人生の一頁がありました。それは当農業は秋の水稻の作柄で部落単位で作況調査を行い、その調査が町そして道の調査が入りその指數に依つて農協及び業者に出す供出米（俵数石数）が決定する訳で、当時、私の家では父が部落会に出ていたわけで作況調査の源となる部落会での作況が不均衡で不鮮明な調査であつたと

今でも記憶に明確に脳裏に刻み込んでいます。

それが今以て不可解でなりません。こん記事を読む方も少なく、遠い過去の物語りでしようが、私の父と七区の竹田さんが司法権発動を受け二人は滝川署の拘置所に入れられました。不平等の調査の陰で、余剩米が沢山あつて闇米と流している方、そして自家米（家族保存用）も不足して秋迄つなげぬ我々、司法権を二戸に向けた町の行政、そして農業委員会は形丈の貧農を見捨てる口ボットだつたのかと、そんな悲惨な農家の大勢いた事を決して忘れて欲しくないです。私の若い当時を想い起す時、臥薪賞胆の想い忘れず気強く農業経営にと精進しました。私は新十津川町立の青年学校一部（以前は実業青年学校と）しか卒業してなく、このままでは農業経営は勿論の事、まづは勉強と当時町内有志が集つての新生同志会に顔も出し少しでも立遅れまいと又、青年団活動部も立遅れまいと、妻も倒れ自分二人では無理かと、妻も倒れ自分も再発したらと将来への不安がよぎりました。数日間考え、農業への未練があつても離農するに当つてどんなに自分を責めた事か。初

牛を取り入れ雑種でしたが、最後は全五頭高等登録を取り併せて種卵を農協へ出荷して高価の収益を上げ、それ等又、生産設備畜舎鶏舎にと土地改良に於ても客土を三ヶ年掛けて三〇年三月に全甫場にと勢力的に行いました。念願だつた女房と稚子との結婚も終え（當時結婚式は自宅にて）やつと經營としての万全の基盤が出来上がり、

この土地に生涯をかけ骨を埋めると心根誓つた矢先、私が過労で倒れ滝川の病院に入院。それも秋の収穫の大繁忙期ですでの、妻も大変だつたが愚痴一つ云わず頑張つてくれました。そうこうし乍らも私共は子宝にも恵まれ長男、次男、長女、子育てと水田と家畜の手入れと大変でしたが、父も健康で農作業子守と助かりました。年月が経ち、炭鉱育ちの女房には経験不足も過労になり、病床に伏す程でないが水田五町と畑二町それに家畜と（季節労務者も時々）やはり二人では無理かと、妻も倒れ自分も立遅れまいと、妻も倒れ自分も再発したらと将来への不安がよぎりました。数日間考え、農業への未練があつても離農するに当つてどんなに自分を責めた事か。初

心貫徹は幻想の夢だったのか：後添いとの葛藤・司法権・経営基盤・離農
第四～第六節



平成17年度 新十津川望郷会総会

平成17年6月20日午前9時30分、新十津川町農村環境改善センターにおいて平成17年度新十津川望郷会総会が開催されました。総会には、会員28名が出席し、山本敬一郎望郷会長のあいさつに続き、小畠莊一新十津川町長が歓迎のあいさつを述べました。

議事に入り山本会長を議長に選出し、議案の審議に入り、承認事項として平成16年度事業報告、決算報告並びに監査報告がなされ承認されました。続いて決議事項として平成17年度事業計画案、収支予算案の改正案が事務局の提案どおり可決されました。

総会終了後、午前10時から行われた戦没者、物故功労者、消防殉職者の追悼式が行われ、全員で黙祷を捧げた後、小畠莊一新十津川町長が式辞を、四釜隆遺族会長、杉本消防団長等らが追悼の辞を述べ、戦没者、物故功労者、消防殉職者に対し献花が行われました。

開町115年記念式典では、奈良県十津川村長更谷慈禧様、奈良県十津川村議會議長古久保勲様も出席され厳粛に式典は執り行われました。来賓や町民の代表者が祭壇に花束を捧げ全員で町民憲章を朗読し続いて植田満新十津川町助役による告諭奉読、佐川純新十津川町教育長による碑文朗読が行われました。

来賓として、更谷慈禧十津川村長から祝辞を賜り、山本敬一郎新十津川望郷会長の万歳三唱で式典は締めくくられました。

平成17年度の新十津川町表彰贈呈では特別功労表彰として、久保田文雄様が受章され、また、60年以上新十津川町に在住する満88歳の開拓功労者15名の方々に感謝状が手渡されました。

農村環境改善センターで行われた懇親会には、多くの方々にご出席を賜り、和やかな雰囲気のなか終了いたしました。



新十津川町トピックス

～まちの出来事～

◆北海道消防操法訓練大会優勝◆

昨年、7月21日に江別市にある北海道消防学校で行われた北海道消防操法訓練大会で空知管内を代表として参加した本町消防団がみごと優勝を手にしました。

全道各地から選抜された7チームがポンプ車操法の部に出場しました。大会では放水までの時間とポンプ車の使用方法や正確に的めがけて放水する技術、チームワームなどを競い合いました。この大会に向け各選手は1月から日々練習を重ねるなどの努力もあって優勝の喜びもひとしおでした。



◆全国中学校剣道大会準優勝◆

昨年、8月18日～20日に三重県伊勢市で行われた第53回全国中学校剣道大会で、新十津川中学校剣道部が男子団体で、見事、準優勝を飾りました。

道内勢では初めての準優勝を飾った新中剣道部は2年ぶり8回目の全国大会に出場し、まず、山梨、長野勢を下し、予選リーグを突破し、決勝トーナメントでは初戦で兵庫勢、2回戦で三重勢、準決勝では宮崎勢を接戦の末に連破したものの決勝では千葉勢に惜しくも敗れました。

役場庁舎にはお祝いの垂れ幕を掲げ、約200名の父母、関係者等が役場庁舎前で選手たちの帰郷を出迎え、健闘を称えました。

この栄誉に町より町長賞（スポーツ賞）、空知教育局より空知管内学校スポーツ・文化活動等表彰、北海道剣道連盟より記念品がそれぞれ贈られました。



◆新十津川徳富ダム定礎式◆

8月24日、町内字幌加の徳富ダム建設工事現場で、ダムの永久堅固と安泰を祈願する「定礎式」が行われました。徳富ダム建設促進期成会が主催し、国会議員をはじめ、各関係者ら160人が参加しました。

式では、同促進期成会長の小畠町長から式辞を述べ、来賓の祝辞の後、母村十津川村から贈られた檜で製作された篋籠に載せられた礎石搬入が神輿会玉置のそろいのはんてんで先導されて行われ、安山岩の礎石がダム基底に置かれ、関係者がスコップでセメントを少しずつ流し込んだ後、ダンプ2台で完全に埋没させました。

最後に出席者全員で万歳を三唱するとともに、くす玉を割り、ダムの順調な完成を祈願した。

徳富ダムは、農業用水、上水道の水源の確保。洪



水災害の防止を目的とした多目的ダムで、昭和63年から付替町道工事に着手し、平成14年7月に本体工事が始まった。堤体の高さ78m、堤頂の長さ309mで総事業費532億円をかけ、平成22年度完成を予定しています。

◆町内から2名が秋の叙勲授賞◆

平成15年4月に勇退した安藤君明前町長が叙勲旭日双光章（自治功労）を受章し、昨年11月7日札幌で行われた伝達式で、高橋知事から表彰状の伝達がありました。

安藤さんは、昭和44年に農業改良普及員から町職員となり、昭和55年に教育長、昭和58年に助役、平成3年町長に当選し、3期12年、町のかじ取り役を担いました。その間本町の基幹産業である農業の振興、生活環境向上や町民の福祉と健康の拠点として総合健康福祉センターを建設するなど町の発展に大きく貢献しました。



昭和50年から現在に至るまで保護司を務める学園在住の桃木薰さんが瑞宝双光章（更生保護功労）を受章し、11月16日に札幌保護観察所長より表彰状の伝達がありました。

桃木さんは、農業の傍ら30年の長きに渡り保護司を務め、犯罪を犯した人や非行に走った人たちの更生援助や地域の犯罪予防活動に力を注ぎ、滝川地区保護司会の副会長、事業部長、新十津川分区長として活躍され、犯罪のない明るい社会の現実に向け大きく貢献しました。



受章両者の受賞祝賀会を12月4日農村環境改善センターで関係者約300名が出席して永年の功績をたたえました。

◆新十津川中徳富駅廃止◆

今年、3月17日、JR北海道札沼線中徳富（なかとっぷ）駅が、19時25分発の新十津川駅発石狩当別駅行きの最終列車を最後に廃止されました。

中徳富駅は、昭和32年11月に札沼線が蒸気機関車からディーゼル機関車に切り替えられるあたり、無人乗降場として設置され、約50年の間、弥生地区など周辺の方の玄関として利用されてきました。

しかし、人口の流出と利用者の減少によって、3月18日のダイヤ改正を前に中徳富駅が廃止されることになり、中徳富駅に到着する最終列車に鉄道ファンが数人訪れ、中には本州から駆けつけたファンもいて最後の姿を見守りました。



新十津川望郷会役員名簿(予定)

18年6月現在

役職名	氏名	住所	電話番号	備考
顧問	小畠 茂一			町長
	松葉 孝文			町議会議長
会長	山本 敬一郎			砂川支部会長
副会長	高棹 政義			札幌花月会会长
	谷口 次雄			釧路支部支部長
	辻本 弘道			留萌支部支部長
	中川 昭五			
理事	前川 庄作			
	増谷 俊秀			郷友会中央会会长
	玉堀 光夫			郷友会中央会副会长
	和平 康伸			
	田崎 利勝			札幌郷友会会长 札幌大和会会长
	薮内 毅			さっぽろ吉野会会长
	柳沢 隆義			
	薮内 英之			
	杉村 修			深川支部支部長
監査	岡田 功			札幌郷友会事務局長
	大久保 宗利			札幌郷友会監査
事務局長	植田 満			助役
事務局次長	佐川 純			教育長
	石田 賢吉			総務課長

編集後記

新十津川望郷会会報第九号を発刊するにあたり、役員並びに会員の皆様にはご投稿のご協力を賜り、心からお礼申し上げます。

来年の第几号の発行にあたり、多くのご投稿をお待ちしております。(原稿用紙を送付させていただきますので、事務局まで電話等でご請求くださいますようお願い申し上げます。)

新十津川望郷会会報
第九号

二〇〇六年六月二十日発行

発行 新十津川望郷会

〒〇七三-一-一〇三

新十津川町字中央三〇一番地一

新十津川町役場内

事務局長(新十津川町助役)

植田 満

印刷
留萌印刷株式会社

☎ 一二五一七六一二一三一